

Chuko Shinsho

aClef



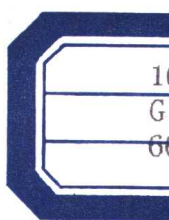
アジア／中東篇

高崎通浩

# 民族対立の世界地図



中公新書  
ラクレ



1
G
60

中公新書

ラクレ

42

高崎通浩

# 民族対立の世界地図

アジア／中東篇

中央公論新社



中公新書ラクレ 42

民族対立の世界地図  
アジア／中東篇

2002年 3月15日印刷  
2002年 3月25日発行

高崎通浩 著

発行者 中村 仁  
発行所 中央公論新社

〒104-8320  
東京都中央区京橋2-8-7  
電話 販売部 03-3563-1431  
編集部 03-3563-3666  
振替 00120-5-104508  
URL <http://www.chuko.co.jp/>

本文印刷 三見印刷  
カバー印刷 大熊整美堂  
製 本 小泉製本

定価はカバーに表示してあります。  
落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送り  
ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

©2002  
Printed in Japan  
ISBN4-12-150042-3 C1231

## 本書に登場する世界の主な語族

インド・ヨーロッパ語族	東方系	インド (パリー、サンスクリット、ヒンディー、ウルドゥー)
		イラン (古代ペルシア、中世ペルシア、近代ペルシア)
	西方系	ギリシア語派 (アイオリス、イオニア、ドーリア、コイネ)
		イタリック語派 (ラテン語→イタリア、フランス、スペイン、ポルトガル、ルーマニア)
		ケルト語派 (ガリア、アイルランド、ウェールズ)
		ゲルマン(チュートン)語派 (フランク、ブルグント、東西ゴート、……イギリス、ドイツ)
		スラヴ語派 (東:ロシア 西:ポーランド、チェコ 南:セルビア、クロアチア)
		バルト語族 (リトアニア、ラトビア)※1
セム語族	アムル、アッシリア、アラム、フェニキア、ヘブライ、アラブ	
ハム語族 ※2	古代エジプト、ベルベル	
ウラル語族	フィン、フィン、エストニア、マジヤール(ハンガリー)	
アルタイ語族 ※3	ツングース系(女真、満州)	
	モンゴル系(柔然、モンゴル)	
	トルコ系 (突厥、ウイグル、ウズベク、カザフ等)	
シナ・チベット語族	中国(漢族)、チベット、ビルマ、タイ	
アウストロアジア(南アジア)語族	クメール、ベトナム、モン	
アウストロシヤ(マライ・ポリネシア)語族	マライ、インドシネシア、ポリネシア、マイクロネシア、チャム、マオリ	
ドラヴィダ語族	タミル	

※1 バルト語族とスラヴ語族は同系とみる学説もある

※2 セム語族とハム語族をアフロアジア語族と一括する説もある

※3 アルタイ語族とウラル語族を一括する学説もあるし、アルタイの三系統を語族とする説もある

本書に登場する語族の言語系統

アウストロアジア語族	ムンダ諸語	サンタール語(インド東部の少数民族) ムンダ語(インド東部の少数民族) サバラ語	
	モン・クメール諸語	カーシ語(インド・アッサム) ベトナム語 クメール語 モン語(ビルマ等の少数民族) ワー語(中国のワ族)	
	ニコバル諸語	(インド領ニコバル諸島住民)	
シナ・チベット語族	シナ・タイ語派		
	チベット・ビルマ語派	カレン諸語(ビルマ等の少数民族)	
		ビルマ・ロロ語群	ロロ語群 (アカ語、リス語など) (雲南、ビルマ等の少数民族)
			ビルマ語群(ビルマ等語など)
			カチン語(中国ではチンポー語)(ビルマの少数民族)
		クキ・ナガ語群	(クキ・チン諸語、ナガ諸語) (ビルマ・インド国境地帯)
		ボド・ガロ語群	ボド語、ガロ語、ティバラ語
		北アッサム語群	アボル語など
	東ヒマラヤ語群	ネワール語など	
	チベット・ヒマラヤ語群	(レプチャ語、チベット語、ラダック語)(チベット自治区)	
	中国語		
	カム・タイ語派 (中国ではトン・スイ語群)	タイ諸語	シャム語(タイ語)
			ラオ語(ラオス)
シャン語(ビルマ等の少数民族)			
チワン語など (中国・広西省自治区など)			
カム・スイ語群(中国ではトン・スイ語群)			
ミャオ・ヤオ語派	ミャオ語、ヤオ語		
アウストロネシア語族(マライ・ポリネシアン語族)	オセアニア語派 (東アウストロネシア)	ポリネシア諸語(タヒチ、マオリ、イースタ、ハワイ、トンガ、サモア、フィジー等)	
		ミクロネシア諸語(マーシャル等)	
	インドネシア語派 (西アウストロネシア)	チャモロ語など	
		西インドネシア諸語	
		マレー語(インドネシア語)	
		ジャワ語、スンダ語	
	チャム語		
	フィリピン諸語		
高山諸語	(台湾先住民「高砂族」)		

目次

表／本書に登場する世界の主な語族  
表／本書に登場する語族の言語系統

第一章 中央ユーラシア①——イラン系民族史とアフガニスタン

イラン系民族の歴史と分布 3

アフガニスタン 11

伝統的部族社会 28

アフガニスタンの少数民族 33

第二章 中央ユーラシア②——トルコ系民族史と旧ソ連領五共和国

トルコ系民族の歴史と分布 35

各共和国の概況

39

ウズベキスタン

43

タジギスタン

48

キルギスタン

52

カザフスタン

54

トルクメニスタン

57

汎トルコ主義の動静

62

中央アジアのアルメニア人

63

### 第三章

#### インド亜大陸

インド亜大陸の政治地図

66

インド亜大陸の民族

69

インド社会の形成

78

宗教社会の形成

80

インド民族主義の成立と展開

96

現代の紛争①——「先住民」ナガ族の民族運動

105

現代の紛争②——ジャルカンド問題

111

現代の紛争③	——	カシミール問題	115
現代の紛争④	——	パンジャブ問題	121
現代の紛争⑤	——	アヨディア事件	129
現代の紛争⑥	——	新仏教徒の動き	132
スリランカ	134		

#### 第四章 東南アジアの分離独立運動

東南アジアの民族地図	150
東南アジアの宗教	157
ビルマの分離運動	161
フィリピン南部モロ族の分離運動	177
タイの分離運動	186

#### 第五章 多民族国家・中国

中華思想と少数民族	192
ウイグルの分離運動	205

第六章 国境なき民族クルド

民族分断の歴史 219

現代のクルド問題 224

第七章 パレスティナ問題とその前史としてのユダヤ人問題

イスラエルという国家 229

ヨーロッパの古典的民族問題「ユダヤ人問題」 238

市民革命後の「ユダヤ人問題」 246

パレスティナ問題の混迷 258

補論 近代のイスラム 276

あとがき 285

索引 i-vi

民族対立の世界地図

アジア／中東篇



## 第一章 中央ユーラシア①——イラン系民族史とアフガニスタン

中央ユーラシアとは、いかなる領域をさすのか？ 本書では、今日の政治・社会情勢上の観点を重くみて、西アジア東方（アフガニスタン近辺）、南アジア北方（パキスタン、インド西北部）を含む内陸アジアほどの意味合いで使っている。

中央ユーラシアに分布する諸民族系統は、トルコ系（アルタイ語族）、イラン系（インド・ヨーロッパ語族）、モンゴル系（アルタイ語族）、チベット系（シナ・チベット語族）等があるが、ここでも今日の政治・社会情勢上の観点からイラン系とトルコ系に最も多く光が当てられる。

### イラン系民族の歴史と分布

## インド・ヨーロッパ語族の拡散

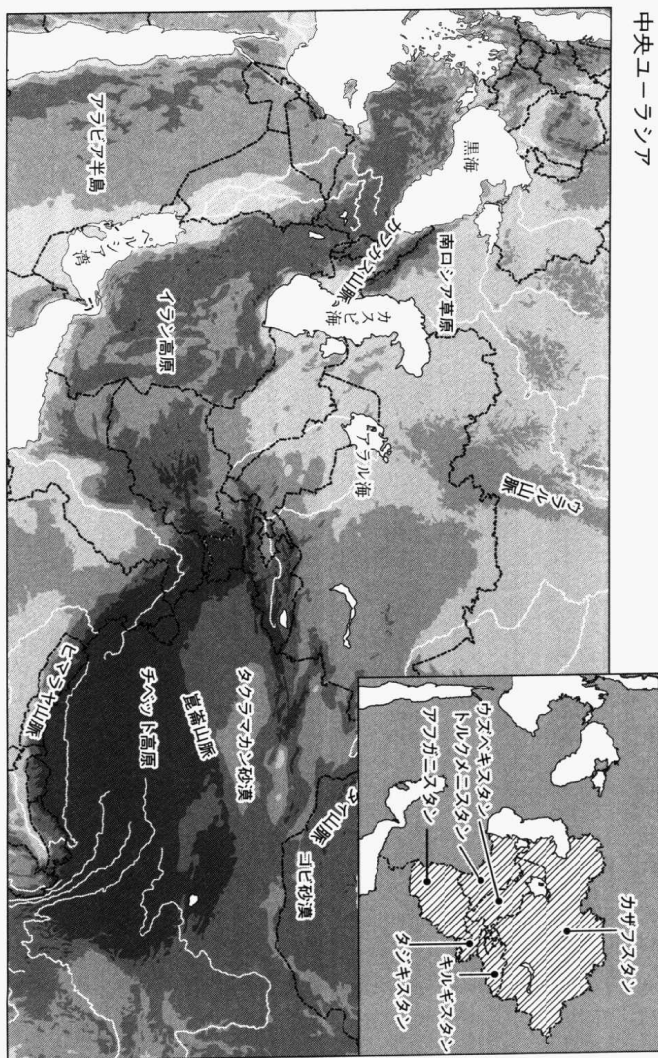
今日、地球レベルでみて、最も広範囲に拡がっている語族は印欧語族（インド・ヨーロッパ語族）である。その原郷や移動・拡散の過程については、まだ十分解明されていないが、ここでは最も有力な所説に従って触れておこう。

印欧語族は、紀元前二〇〇〇年ごろ、原郷の地（おそらくは黒海、カスピ海の北方の南ロシアの草原地帯）から各方面に移動・拡散をはじめた。移動・分布の様相から、印欧語族は、東方系と西方系に大別される。東方系の中にインド系やイラン系が含まれる。

印欧語族東方系は、前二〇〇〇年紀の移動の過程で、言語的に分岐し、イラン語派、インド（アーリヤ）語派、ダルディック語派に枝分かれしていった。インド語派は、『リグ・ヴェーダ』（前二二〇〇年頃）というインド最古の文献をもち、イラン系言語で書かれた最古の文献は、ゾロアスター教（前七世紀に成立）の聖典『アヴェスタ』（成立年代不詳）とされるが、この両者で用いられている言語は、極めて近い関係にあり、古代インド語と古代イラン語（ペルシア語）の話者が話を交わせば、紀元前五世紀頃までは何とか意味が通じたのではないか、といわれている。

印欧語族東方系の中に、アーリヤを自称する集団があり、その一部は、前二〇〇〇年紀に中央アジア、イラン高原に展開し、イラン系民族の起源をなした。さらに他の一部は、前一

中央ユーラシア



五〇〇年ごろ、カイバル峠を越えて、インド亜大陸に侵入し、インド・アーリヤ人とかアーリヤ人と呼ばれて、今日のインド亜大陸住民の最大の構成要素となっている。

### 歴史上初のイラン系国家

イラン系民族は、ほかのインド・ヨーロッパ語族よりも遅れて移動を開始した。それでも、紀元前一〇〇〇年紀のはじめ頃には、西はイラン高原から、東はタリム盆地（現在の中国・新疆ウイグル自治区）にいたる広大な地域に拡がり、遊牧生活と並行して、各地で定着農耕生活に移行していった。西方に進出したイラン系民族で、歴史上初のイラン系国家を打ち立てたのはメディア人である。メディア王国は当初、アッシリア帝国に屈していたが、紀元前六一二年、カルデア人とともに、アッシリア帝国を滅ぼし、イラン高原からクルディスタンを支配する王国として強勢化した。

今日、イラン、イラク、トルコ三国にまたがる地域（クルディスタン）に居住するクルド族の原型は、メディア人と先住民との混血のうえに形づくられた（二二二ページ）。

古代ペルシア人は、メディア人よりはやや遅れて、イラン高原にやってきた。彼らは、しだいに南下し、紀元前六世紀半ばには、ペルセポリスを中心とするイラン西南部に達している。そして、同じイラン系の国家メディア王国などを滅ぼし、紀元前六世紀末には、東はイ

ンダス川流域から、西はリビア、バルカン半島の一部に及ぶ大帝国に発展するのである。

### 中央アジアのイラン系民族

東方のイラン系民族には、シルクロードの国際商人として活躍したソグド人、中央アジア西部から西北インドを支配領域としたクシャーン朝（一〜三世紀）のクシャーン族などがある。

イラン系民族が最も東方に達したタリム盆地でも、ホータン（コータン）などのイラン系のオアシス都市国家が成立した。クチャ（亀茲）、楼蘭（ロウランクロライナ）などでも、イラン語派の言語や別の印欧語が流通していた。近年、時折話題となる楼蘭から出土する文書にも、イラン系の言語が記されており、イラン文化が、遠く今日の中国西北辺にまで及んでいたことが知られる。つまり、今日トルキスタン（トルコ人の居住地）と呼ばれる中央アジア全域は、当時はイラン地方といっても差し支えないような状況にあったのである。

中央アジアに拡がったこれらのイラン系民族は、九世紀後半以降のウイグル族をはじめとするトルコ系遊牧民の進出により、払拭されてゆく。唯一生き残ったのがタジク族である。

### 北方のイラン系民族

このほかのイラン語派に、ヘロドトスの『歴史』などのギリシア語文献によって紹介され

たスキタイ人がある。スキタイ人は、紀元前七〜四世紀頃、黒海北方の草原地帯で活躍した遊牧騎馬民族である。その文化は金銀器などに刻まれた動物意匠の裝飾美術で知られ、また「草原の道」（ステップルート）を經由して、遊牧騎馬戦術を東に伝え、匈奴の遊牧騎馬民族化を促したともいわれる。

スキタイ人の後、この地域で覇権を握ったサルマタイ（サルマート）も、北方イラン系と推定される。サルマタイは、四世紀、西進するフン族によって滅ぼされるが、その言語は、今日カフカス地方に居住するオセット人（七三万人）の言語に継承されているといわれる。

オセット人は、カフカス山脈を挟んで北オセチア（ロシア共和国内、六三万人）と南オセチア（グルジア共和国内、一〇万人）に分かれて居住するが、その民族的特異性が、カフカスの民族紛争に大きな影を落としている。周囲の民族が、カフカス諸語に属する言語を話すムスリムで、かつてロシア帝国のカフカス侵攻に頑強に抵抗したのに対し、イラン語派のオセット語を話し、キリスト教徒が多いオセット人は、いわば「帝政ロシアの尖兵」の役割を果たした歴史をもつ。

#### イランとアフガニスタンのイラン系

今日のイラン・イスラム共和国に居住するイラン系民族としては、近代ペルシア語を話す